

飼い主のための ペット同行避難マニュアル

取手市動物愛護協議会
取手市

令和4年1月作成

令和8年4月改定



目次

1	目的.....	2
2	用語の解説.....	2
3	飼い主の心構えと準備.....	3
4	ペット用避難用品と備蓄品の用意.....	7
5	災害発生時の対応.....	8
6	避難所生活におけるペットの管理.....	8
7	飼養スペースの検討.....	10
8	避難所以外でのペット飼養.....	11

1 目的

災害時は何よりも人命が最優先ですが、近年ではペットを家族や人生のパートナー、生活の支えとみなす意識が広がっています。そのため、災害時に飼い主とペットが同行避難することは、飼い主の心の安定にもつながる重要な対応と考えられます。

これまでの大規模災害では、飼い主とペットが離ればなれになった結果、飼い主を失った犬が野生化して人に危害を加えるなど、さまざまな問題が報告されました。こうした事態を未然に防ぐためにも、ペットの同行避難を推進する必要があります。

一方で、災害時の基本は飼い主自身による「自助」です。自助とは自分の命を自分で守ることで、同時にペットの健康・安全・命を守る責務も飼い主にあります。避難所では、ペットを飼っていない方への配慮も求められます。本マニュアルは、災害時のペット同行避難について広く理解を促し、誰もが安心して避難生活を送れるように準備を整えることを目的としています。

行政は被災したペットの飼い主に対する支援(例:避難所でのペット受け入れ)を行います。ペットを終生飼育するという原則と、その責務が飼い主にあることに変わりはありません。



2 用語の解説

ペット

本ガイドブックで「ペット」とするのは、犬や猫などの小型哺乳類および鳥類を主な対象とします。一方で、人に危害を加える恐れのある大型動物や危険動物(例:ワニガメ、ニシキヘビなど)、特定生物・特定外来生物に指定された動物、あるいは専門的な設備や環境(例:水槽での飼育)を要するため災害時の対応や避難が困難な動物は、本ガイドブックの「ペット」には含みません。これらを飼育している方は、災害発生時の対応をあらかじめ十分に検討してください。

同行避難

同行避難とは、災害発生時に飼い主が自ら飼育しているペットを連れて避難所まで移動することを指します。これは、被災者と同じ室内でペットを飼養・管理することを意味するものではありません。ただし、盲導犬、聴導犬、介助犬などの補助犬についてはこの限りではありません。

避難所

災害により居宅を失ったり、ライフラインが寸断されて生活が困難になった人々が、避難生活を送るために利用する体育館などの公共施設を指します。



3 飼い主の心構えと準備

災害時には、ペットを守るために飼い主が無事であることが重要です。

○普段の暮らしの防災対策

飼い主が無事であるために、住まいの耐震性を高めたり、家具や家電の転倒防止を行ったりして、日頃から備えましょう。ペットが普段いる場所に配慮して落下物や隙間がないように配置・固定すれば、飼い主だけでなくペットの安全確保にもつながります。

犬を屋外で飼育している場合は、ブロック塀やガラス窓など飼育場所周辺に破損や建物の倒壊の恐れがないかを確認してください。また、首輪や鎖が外れたり切れたりして犬が逃げ出すおそれがないか、取り付け状態や耐久性も点検しておきましょう。

○なぜ同行避難が必要か

ペットの同行避難は、単に「ペットを救うための行動」だけではありません。もちろん、家族同然のペットを守りたいという思いが同行避難の大きな動機であることは言うまでもありません。しかし、過去の震災では、いったん避難した飼い主が「ペットを避難させるために自宅に戻った」際に、再び災害に巻き込まれてしまった事例が報告されています。

こうした事例を踏まえ、同行避難を推進する本来の目的は、飼い主自身の安全を確保すること、ひいて地域に暮らすすべての住民の安全を守ることにあります。飼い主が無理に自宅へ戻る必要がなければ、二次被害や救助活動への負担も減らせます。

また、東日本大震災の教訓として、同行避難が実現できなかったため、やむを得ず放された犬や猫が繁殖して個体数が増加し、復興を妨げる要因になったケースも確認されています。災害後に生じるこうした二次的な問題を軽減するためにも、災害時におけるペットの同行避難を適切に推進することが重要です。

○必要なしつけと健康の管理

避難所生活に適応できるよう、日頃から必要なしつけや健康管理を行っておきましょう。キャリーやケージに慣れさせる、トイレのしつけ、常用や予防接種の管理、定期的な健康チェックなど、具体的な準備をしておくことで安心です。こうした対策は周囲の避難者に迷惑をかける行動を防ぐだけでなく、ペット自身の不安やストレス軽減にもつながります。

○動物病院、獣医師への相談

日頃から、しつけ方や飼育方法、健康管理などについて疑問や不明点があれば、早めにかかりつけの獣医師に相談しておきましょう。

POINT

しつけと健康管理の例

避難所は特別な環境になるため、ペットが安心して過ごせるよう配慮することが重要です。また、他のペットとのトラブルを避けるためにも、事前に以下の項目を確認しておくことで、避難所への移動がスムーズになります。

犬の場合

- ・基本的なしつけ(マテ、フセ、オイデ、オスワリなど)を身につけさせる。
- ・ケージやキャリーバッグに抵抗なく入れるように慣らす。
- ・吠えたときにやめるようにしつけを行う。
- ・狂犬病予防接種や各種ワクチンを、適切な間隔で接種する。
- ・寄生虫の駆除と予防を定期的に行う。
- ・不妊・去勢手術を受けさせる。
- ・定められた場所で排泄できるようにトイレのしつけをする。
- ・人や他の動物に過度に怯えないよう、社会化を図る。
- ・被毛や皮膚を含め、身体を清潔に保つ。



猫の場合

- ・ケージやキャリーバッグに抵抗なく入れるよう、日頃から少しずつ慣らしておく。
- ・人や他の動物に対して恐怖心を抱かないよう、社会化を進めて慣れさせる。
- ・決められた場所で排泄できるよう、トイレトレーニングを行う。
- ・必要な各種ワクチンを、適切な時に確実に接種する。
- ・ノミ・ダニ・回虫などの寄生虫は駆除し、定期的な予防を行う。
- ・不妊・去勢手術を受けさせる。



○ペットが迷子にならないために所有者明示を

外から見て誰にでもすぐわかる、目立つ迷子札を付けましょう。なお、犬には犬鑑札と狂犬病予防注射済票の装着が法令で義務付けられています。

また、脱落の恐れがないマイクロチップは、万が一首輪や迷子札が外れてしまった場合でも確実な身分証明になります。

POINT

マイクロチップとは？

マイクロチップは直径 2mm、長さ 8～12mm ほどの小型電子標識器具で、15桁の番号が記録されています。体内に装着すると首輪や迷子札のように外れる心配がほとんどなく、より確実な身元証明になります。装着は動物病院などで行います。

装着後は、必ず「環境省 犬と猫のマイクロチップ情報登録」に登録手続きを行ってください。

○避難所と避難ルートの確認

飼い主は市のホームページやハザードマップ、取手市地域防災計画で、避難所の場所や到達ルートなどを事前に確認しておきましょう。

また、日頃から近隣住民と良好な関係を築けるよう、コミュニケーションや飼育マナーに気を配り、発災時に自宅にいない、または帰れない場合でも互いに助け合えるよう、防災について事前に話し合っておくことも重要です。



4 ペット用避難用品と備蓄品

避難先でのペット飼育に必要な物品は、必ず飼い主自身が用意してください。食事や飲み水、常用薬、トイレ用品、キャリーケースなどは少なくとも5日分、可能であれば7日以上を目安に備えておきましょう。

POINT

同行避難に必要な物(例)

- ケージ(故障や不具合がないことを事前に確認してください)
- ペットフード、飲用水(7日分以上を目安に)
- 療法食、常用薬(投薬方法や投薬記録も一緒に)
- 予備の首輪・リード(伸縮しない、伸びないタイプのもの)
- ペット用食器、フード保存用の密閉容器
- 排泄物処理用品(ペットシート等)、トイレ用品、ビニール袋
- 飼い主の連絡先、預け先の住所・連絡先情報
- ペットの写真(名前・呼び名が分かるもの)
- ワクチン接種記録(接種証明や手帳など)
- かかりつけ動物病院の連絡先、通院履歴などの情報メモ
- アレルギーの有無(食物を含む)
- 洗濯ネット(猫の場合、保護や診察の際に使用)
- タオル、ガムテープ(ケージ補修など)
- カッター、マジック、ウェットタオル、犬用靴下(ガレキがある場合)



5 災害発生時の対応

災害が発生した場合は、まず自身の安全を確保した上で、落ち着いてペットの安全を確保してください。ペットは驚いてパニックになることがあるため、ケージやキャリーケースに入れるなどして、逃げ出さないよう十分に注意しましょう。

○同行避難の準備

地震の際は、余震や家屋の倒壊の恐れなどを冷静に見極めてください。避難が必要だと判断した場合は、飼い主ご自身とペット用の避難用品を忘れずに携行し、ペットと一緒に避難所へ同行避難してください。



6 避難所生活におけるペットの管理

同行避難で連れてきたペットが、他の避難者にとって癒しになるか不満の対象になるかは、飼い主の対応(しつけや衛生管理、排泄の処理など)によって大きく左右されます。

慣れない場所での生活はペットに強いストレスを与え、その不安は周囲の避難者にも伝わりやすく、先行きが見えない不安からペットをめぐる対立が起こりやすくなります。飼い主は他の避難者に迷惑をかけないように、周囲に配慮した行動を心がける必要があります。

なお、避難所ではペットと同室での飼育はできません。

○避難所ペット登録台帳への登録を済ませます。

指定されたペット飼養スペースには、ケージごと設置します。飼い主同士が協力して、日常の清掃や点検などを含めた維持管理を行います。

○避難所等におけるペットの飼養

原則として、飼養は飼い主が自ら行ってください。ただし、飼い主が負傷など

により飼養が困難な場合は、他の飼い主やボランティアの協力を得て飼養を行ってください(共助)。

○ペット飼養スペースと周辺の清掃、消毒

避難所は地域の公民館や小・中学校の施設を利用している場合が多いため、閉鎖後に速やかに通常利用できるよう、日ごろから清潔に保ちましょう。

※大型犬はケージではなく、係留での管理となります。

○ペット用トイレの清掃、糞尿の後始末

避難所でのペットに関する苦情の多くは、鳴き声と悪臭が原因です。避難者の理解を得るためにも、飼い主同士で協力して清潔を保ち、周囲に配慮することが大切です。

特に犬は、定期的な散歩や運動でストレスを発散させることで無駄吠えを減らすことができます。散歩時間を決める、リードをつける、排泄物を確実に処理するなど、基本的なルールを守って行動しましょう。

○居住スペースにはペットは持ち込めません。

動物アレルギーのある方や動物が苦手な方が同じ空間で共同生活することがあります。その場合は、周囲との調整や配慮が重要です。

身体障害者補助犬法は補助犬の公共施設への同伴を認めていますが、避難所などに動物アレルギーのある避難者がいる場合は、双方に配慮した対応が必要です。

○ペット飼養スペースへの飼い主以外の立ち入りは原則禁止します。

ペットのストレスが原因で事故が発生するおそれがあるため、立ち入りは禁止します。ご理解とご協力をお願いいたします。



7 飼養スペースの検討

避難所等を開設及び運営する市職員や避難者などの避難所運営組織は、避難所等のどこに飼養スペースを設置するかあらかじめ検討しておくことが重要となります。

なお、フード、水やケージ、リード、その他の用具など、ペットの飼養に必要な物は飼い主が各自で持参することが原則となっています。

○暑さ、寒さや風雨の影響を受けにくい場所

夏の高温や冬の低温を避けるため、可能な限り屋内を優先します。屋外を使用せざるを得ない場合は、倉庫や屋根のある作業場、テントなど、風雨や直射日光を遮る設備の利用を検討してください。屋内にする場合でも、適切な換気や温度管理に留意することが望ましいです。

○ペットと人の動線が交わらない場所

飼い主以外の人(特に子供)が動物に触ろうとして、かまれたり、引っかかれたりする事故を防ぐため、居住区画の避難者との動線を離す必要があります。動物も行き来によるストレスで病気になりやすくなります。

○鳴き声や臭気が居住区画に届かない場所の確保

鳴き声や匂いによるトラブルを避けるため、避難者が活動する場所からできるだけ離すか、防音性の高い部屋や倉庫で飼養すること及び炊事場や洗濯場所から離れた場所を検討する必要があります。

○できるだけ動物種ごとに飼育場所を分ける

犬と猫のような異種の動物の存在は、動物同士の間で警戒からくるストレスが生じます。そのため、鳴き声の問題が発生したり、ペットはストレスから病気を発症したりします。可能な限り飼養スペースの中でも動物種ごとに区別することが必要です。特に犬のように鳴き声の問題になりやすい動物は、音の響きを考慮して、他のペットとは別の場所を検討する必要があります。



8 避難所以外でのペット飼養

避難とは、災害や危険から身を守るための行動です。避難＝避難所に行くことだけではありません。

避難所以外での分散避難(近隣の安全な場所や一時的な待避場所への移動)も選択肢のひとつです。状況に応じて、柔軟に検討してください。

○自宅管理での飼養

ペットは環境の変化に弱く、環境が変わると体調を崩しやすくなります。家屋の安全が確保され、危険がない場合は自宅で飼育し、ペットとともに在宅避難(自宅にとどまって避難)することが可能です。

ただし、危険な状態が続いている場合や家屋の安全が確認できない場合は、必ず避難所へ同行避難してください。

○車中泊

一時的な避難では、自家用車での移動も選択肢のひとつですが、飼い主自身の健康(エコノミークラス症候群や熱中症など)やペットの熱中症等に十分注意する必要があります。車内の高温や長時間の同じ姿勢は、飼い主にもペットにも重大な影響を及ぼすおそれがあります。

飼い主が車を離れる場合は、必ずペットをケージやクレートなどの安全な場所に移すか、車内に残さないようにしてください。特に気温が高い時や換気が不十分な場合は、ペットを車内に置き去りにすることは避けましょう。

○ペットホテル、友人、知人宅での飼養

民間のペットホテルや遠方の友人・知人などに預かってもらうことも、選択肢のひとつです。日頃から複数の預け先や避難先を確保しておきましょう。



参考様式

ペットのプロフィール

- 名前
- 体重
- 性別
- 病歴
- 健康状態
- 投薬内容
- 性格など

ペットの写真をお貼りください